http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.211　17/04/26

パロディ「山月記」（続き）

（続き）

たまたま避暑に行って出合ったある銀座のホステスは、この頃のＡについて、「顔、見ただけで、コワクッて……」と、何か見てはならないものを見てしまった、というように語ってくれた。

それが、ひょっこり、この一年ほど前に、ほとんどＡの存在を忘れかけていた芸能界に再び戻って来たのだ。自分の文士としての才能に見切りをつけたのか、よっぽど生活が苦しくなっていたのか。以前不義理をした事務所やレコード会社に頭を下げて歩いたらしい。しかし、Ａが元の栄光の座に戻れなかったのは言うまでもない。が、それどころか、かつての同僚たちはそれぞれレコード会社や大手のプロダクションの重役におさまっているものもおり、Ａの助手をしていたような連中までが「センセイ」と呼ばれる身分になつていた。こうしたことはＡのようなタイプの男には耐えがたい屈辱であったろう。自尊心を傷つけられたＡはますます内にこもるようになり、人付き合いもなくなっていった。それでも生活のために耐えていたのであろう。考えようによってはよくもまあ、ああした境遇で一年近くもガマンしていたとも言える。実際、そう言っている人もいる。それが、六月四日の朝、取材のために山中湖へ行くと言って家を出たきり、家族のもとへ二週間以上も連絡を断っている。事務所の話では、簡単な取材なので二泊三日の予定だったという。一方、旅館の人の話では、六月四日の夜、食事を持っていった時、何か訳のわからないことを言っていたということだ。また、住み込みの従業員は夜中に変な声で目をさまし、廊下をのぞいたところ人影が動くのを見たと証言をしている。ともかく、六月五日の朝、食事の用意に行ったときにはすでにＡの姿は見えず、ボストンバツクだけが残されていたということだ。

はじめはどこかへ行ってすぐ戻ってくるものと思っていたのが、二日たっても三日たっても帰って来ず、五日目にＡの事務所からの電話で、どこにもいないことが確認され、この騒ぎとなった。家族は、以前よく家をあけていたので、はじめは仕事の都合で帰りが遅れているのだと思つていたようだが、関係者の話では最近ではそれ程時間のかかる重要な仕事はまかされていなかったということだ。警察、消防団が動き出してからちょうど十日になる。そして、いつこうに手がかりがつかめないままだ。それにしても残された家族のことを思うとこんな気の毒な話はない。

なんとも奇怪でいたましい事件である。我々はただ少しでも早く、Ａさんの行えを探す手ががりがつかめることを祈るだけだ。

＊

冒頭部分を芸能記事風にまとめてあるところが面白く、売れっ子の作詞家であるとか、レコード大賞とか、時代性を感じさせる部分もあるが、それがバブル当時の雰囲気を伝えていて、私などには懐かしい感じである。今なら李徴のパロディを担う人物の人物像はどう設定され、どんな媒体の記事となるのだろう（Twitterとか）？そんなことを考えるのも、なかなか楽しいのではなかろうか。